

日本文法教本

文部省檢定濟
金澤庄三郎著

卷四

4a
815
明43

41837

教科書文庫

4
815
41-1910
20000
81511

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

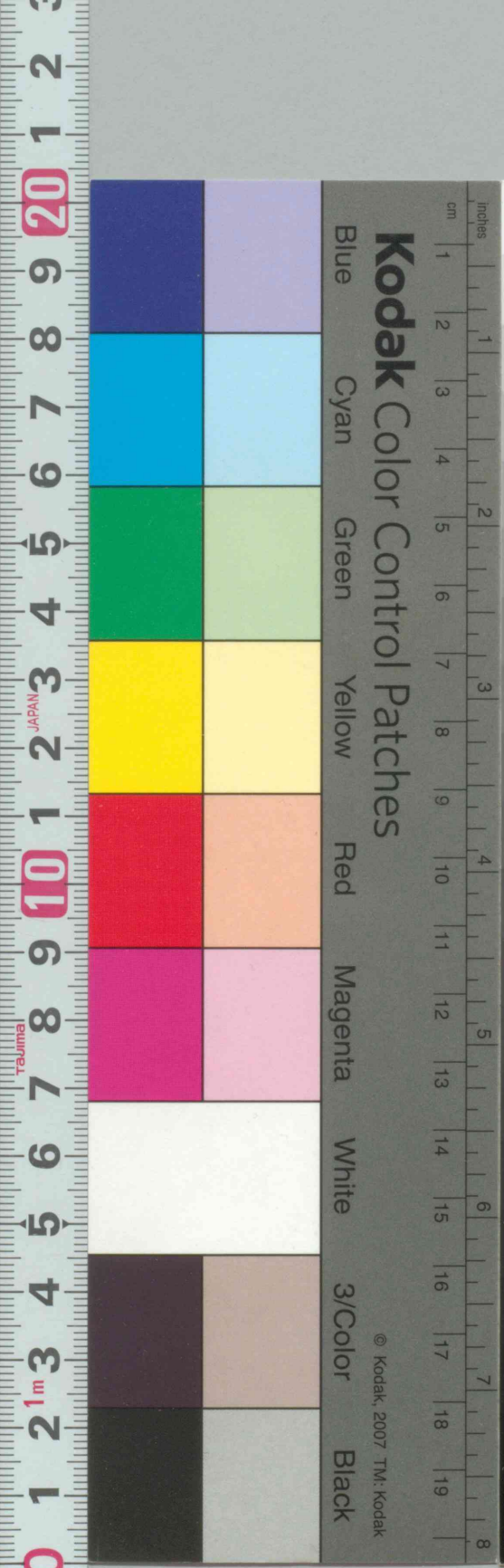


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



42
815
01143

日八十二月二年三十四治明
濟定檢省部文

文學博士金澤庄三郎著

日本文法教本

東京 開成館藏版



卷四 目次

第一章	文章の主要成分……………	一
第二章	文章の主要成分の構成……………	五
第三章	文主……………	三
第四章	修飾語及びその構成……………	一五
第五章	文章の主要成分の位置……………	三
第六章	文章の主要成分の併置……………	一七
第七章	文章の主要成分の省略……………	一四
第八章	句及び節……………	一六
第九章	文章の組織……………	一四
第十章	文章の性質……………	一五

卷四 目次

資料室

Handwritten notes in cursive script covering the top and left margins of the page.

第十一章 係結法.....

七

第十二章 文章の解剖.....

六

Handwritten notes in cursive script covering the right page, including the name 'K. Oshita' at the bottom.

日本文法教本 卷四

文學博士 金澤庄三郎著

第一章 文章の主要成分

單語。

花。犬。われ。字。父。家。子。
美し。走る。書く。譲る。

これらの花、犬など及び美し、走るなどは、いづれも一つの概念をあらはせり。これらをすべて單語といふ。

文章。さて單語の相集りて一つの完結したる思想をあらはすときは、これを文章といふ。

第一章 文章の主要成分

Handwritten notes in cursive script at the top of the left page.

花美し。

犬走る。

われは字を書く。

父は家の子に譲る。

これらは、いづれも文章なり。

主語述語。右の文章は、それごとく花、犬、われ、父につきて或事を敘述せるものにて、即ち

花、犬、われ、父

は、いづれもその文章の主題なり。かくの如き語をすべて文章の主語といふ。

また右の文章の中なる

美し、走る、書く、譲る

は、それごとくその文章の主語たる花、犬、われ、父の状態動作などを敘述せるものなり。かくの如き語をすべて文章の述語といふ。

いかなる文章にも、必ず主語と述語となかるべからず。

客語。なほ前の

われは字を書く。

といふ文章の述語たる書くは、他動詞にて、

字を

は、その動作の及ぶ事物をあらはせるものなり。かくの如き語をすべて文章の客語といふ。右の例の如く、述語が他動詞にて成れる文章には、主語と述語との外に、必ず客語なかるべからず。

補語。 また、前の

父は家を子に譲る。

といふ文章にては、述語たる譲るは他動詞にて、家をはその動作の目的をあらはす客語なれど、別に

子に

といふ語にて述語の意義を補ふにあらざれば、完結したる思想をあらはすこと能はず。かくの如き語をすべて文章の補語といふ。

述語が自動詞にて成れる文章も、補語を要することあり。

將軍白馬に乗る。

述語が形容詞にて成れる文章も、補語を要することあり。

花は雲の如し。

述語が使役の助動詞、受身の助動詞を含む文章には、必ず補語なかるべからず。

有志者は總代をして上京せしむ。

兎は犬に追はれたり。

文章の主要成分。上に説きたるが如く、文章には必ず主語と述語となかるべからず。またその述語の性質によりては客語と補語となかるべからず。されば、主語と述語と客語と補語とは、いづれか一つを闕きては、文章の成立たぬことあり。この四つを文章の主要成分とす。

第二章 文章の主要成分の構成

主語の構成。主語は文章の主題となる事物をあらはすも

軍部ハ... 補語トシテ...

のなれば、名詞または代名詞にて成る。

戦始る。

かれ去る。

主語は、また種々の豆爾乎波を伴なふことあり。

日本は強し。

花が咲く。

人の行く。

友も来りぬ。

春ぞ樂しき。

誰れか歸りたる。

述語の構成。

述語は主語のあらはす事物の動作、状態などを敘述するものなれば、主として動詞、形容詞にて成る。

鳥飛ぶ。

學博し。

述語はまた助動詞を伴なふことあり。

空霽るべし。

月出でたり。

われは往なむ。

主人は車夫に客を送らす。

北軍は南軍に破られたりき。

また豆爾乎波を伴なふことあり。

汝等努力せよ。

水清きか。

病は癒えたりや。

名詞、代名詞も、助動詞なり、たり、または豆爾乎波ぞ、かと結びつきて、述語を成すことあり。

正成は忠臣なり。

威風堂々たり。

かれは誰ぞ。

これは何か。

客語の構成。 客語は述語たる他動詞の動作の及ぶ事物をあらはすものなれば、名詞または代名詞にて成る。

力山を抜く。

父かれを召す。

客語は必ず豆爾乎波を伴なふ。このを省略することあり。

客語に伴なふ
豆爾乎波

友は舟漕く。

汝これ見よ。

補語の構成。 補語は述語たる動詞、形容詞の意義を補ふ事物をあらはすものなれば、また名詞或は代名詞にて成る。

学校長は卒業生に證書を授く。

兄は陸軍大尉となる。

春海の如し。

壯烈鬼神を泣かしむ。

知事は屬官をして事情を調査せしむ。

柳風に吹かる。

村長は村民より感謝状を贈られたり。

補語は必ずと、の、ををして、よりなどの豆爾乎波を伴なふ。

補語に伴なふ
豆爾乎波

副詞節

動詞、形容詞、助動詞の連體形。動詞形容詞の連體形及び動詞または名詞に結びつきたる助動詞の連體形が、下なる名詞を略して直に名詞の如く用ひらるゝこと、前卷に説きたり。されば、かくの如き語も、名詞と同じく、また文章の主語、客語及び補語となることを得べし。

降るは春雨か。

新しきはよし。

産まれたるは男兒なり。

純粹なるは少し。

妹は赤きを紫なるに著かへたり。

練習問題 第一

次の文章の主語、述語、客語及び補語を示せ。

一。獅子吼ゆ。

二。山もかすめり。

三。鶯や來鳴く。

四。朝日うらゝかなり。

五。交際深し。

六。先生書を著す。

七。誰れかこれを解する。

八。伯父、妹等に寫眞を示す。

九。一家、滿洲に移る。

一〇。從兄は一家を滿洲に移せり。

一一。一メートルは三尺三寸に等し。

一二。大臣は祕書官をして委員と交渉せしむ。

- 一三。余は父より一身を家業に委ねしめられき。
- 一四。はたらくが薬なり。
- 一五。君は老いたるをあはれみ給へり。

練習問題 第二

次の語または語群に適當なる語を加へて、文章を作れ。

- 一。人。人は萬物の靈長なり
- 二。起く。今朝早く起く
- 三。兒ども捕ふ。
- 四。われは従ふ。
- 五。先生は教ふ。
- 六。湯に混ず。
- 七。同盟を約す。

第三章 文主

文主。例へば

力強し。

といふは、一つの文章にて、力はその主語、強しはその述語なり。然るに

牛は力強し。

といへば、これもまた一つの文章にて、牛はその主語の如く、力強しはその述語の如きものなり。即ち牛は述語の如くなれる文章、力強しに對して、主語の如くなれり。かくの如き語を、すべて文主といふ。

われは身體強健なり。

前の例も一つの文章にて、身體は主語、強健なりは述語、われはは即ち文主なり。

錫は色銀に似たり。

名古屋は世人これを中京ともいふ。

この例の中なる錫は及び名古屋ははまた共に文主なり。

文主の構成。 文主の構成は全く主語と同じきこと、前の諸例にて見るが如し。

練習問題 第三

次の文章の主語、述語、客語、補語及び文主を示せ。

- 一。君は家富めり。
- 二。いづれか年わかき。
- 三。太郎は學術優等なり。

四。酒は害あり。

五。水晶は外觀硝子の如し。

六。かれ齊力人に過ぐ。

七。余は性質音楽を好む。

八。庶務は幹事これを處理す。

第四章 修飾語及びその構成

修飾語

櫻の花美し。

大速に走る。

われはこまかき字を書く。

父は家をその子に譲る。

この例の中なる

櫻の	は	主語	花に、
速に	は	述語	走るに、
こまかき	は	客語	字を、
その	は	補語	子に

附屬して、いづれもその意義を修飾するものなり。かくの如きものを、すべて文章の修飾語といふ。修飾語はまた文主に附屬することあり。

肥えたる牛は力强し。

主語の修飾語の構成。 文章の主語は名詞、代名詞にて成るものなれば、これに附屬する修飾語は、(一)連體法の動詞及び形容詞、(二)動詞、名詞に結びつきたる連體法の助動詞、及び(三)

亓爾乎波の、がなどの結びつきたる名詞、代名詞にて成る。

(一) 吹く風すゞし。

小き鳥飛ぶ。

老いたる人眠れり。

(二) 優勢なる敵現る。

この繪珍し。

(三) 君が代めでたし。

文主の修飾語の構成

文主は、その構成、主語と同じければ、これに附屬する修飾語の構成も、また主語の修飾語の構成に同じ。

述語の修飾語の構成。 文章の述語は、主として用言にて成るものなれば、これに附屬する修飾語は、また主として(一)副詞(二)に、を、と、へ、より、まで、にてなどの結びつきたる名詞、代名

詞及び(三)は、とも、どなどの結びつきたる用言にて成る。

(一) 人皆去る。

石水に落つ。

本隊は山道を進む。

われ弟と軍艦を見る。

(二) 川東へ流る。

友遠方より来る。

汽車鹿兒島まで通ず。

われ筆にて字を書く。

水こほれば氷となる。

(三) われ死すとも退かじ。

家狭けれど美し。

述語が助動詞なり、たり及び亘爾乎波ぞ、かななどと結びつきたる名詞、代名詞にて成るときは、主語の修飾語と構成の同じき修飾語を附屬せしむることを得。

正成は稀なる忠臣なり。

君は一村の模範青年たり。

かれはいづこの誰ぞ。

それは珍しき品か。

述語の修飾語に結びつくべき亘爾乎波に、とは省略するこ
とあり。

明治三十八年五月二十八日日本海の海戦あり。

この議論は實際行はれざりき。

余は斷然これを斥けたり。

述語の修飾語
に結びつくべ
きに、との省
略

客語及び補語の修飾語の構成。文章の客語及び補語は、共に主語と同じく名詞、代名詞にて成るものなれば、これに附屬する修飾語の構成も、主語の構成と同じ。

われらは散る花を惜しむ。

將軍逞しき馬に乗る。

市民は精巧なる工藝品を觀光の遠人に送る。

修飾語の重用。修飾語は幾つも重ねて用ふることあり。

美しき鳥飛ぶ。

汽車始めて鹿兒島まで通ず。

君は實に一村の模範青年たり。

われらは散る美しき櫻の花を惜しむ。

名譽の將軍はわかき栗毛の逞しき馬に悠然と乗る。

鳥の飛ぶ

複雑なる修飾語。修飾語には、種々の語の集りて成れる複雑なるものあり。左に數例を示す。

袂を吹く風すゞし。

輕き袂を吹く風すゞし。

受験者は殆ど皆合格せり。

本隊は極めて嶮しき山道を進めり。

正成は世に稀なる忠臣なり。

主人は某の大家の筆に成りし金屏風を藏せり。

乃木將軍は旅順の降將の贈りたる名馬に乗れり。

われらが日々に通へる學校は、風紀嚴肅なり。

修飾語の位置。前の諸例に見るが如く、修飾語は文章中にありてその附屬する語の上に立つて通例とす。

水濱にぞとどりより
水は流るはとどりより

練習問題 第四

次の文章の修飾語を示し、その何に附屬するかをいへ。

- 一。清き川、村の東を流る。
- 二。萬民皆天日の光を仰ぐ。
- 三。わが師は温厚なる君子なり。
- 四。大君の惠の露は、あまねく民草を露せり。
- 五。友はおもしろき通信を故國の同窓生に寄せたり。
- 六。君少し僕が情懷の苦を察せよ。
- 七。月盈つれば虧く。
- 八。眞に信憑すべきは、この新聞紙の記事なり。
- 九。脆きは人の心なるかな。
- 一〇。過ぎたるは、なほ及ばざるが如し。

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
一〇、

復雜

復雜用
出修
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
一〇、

- 一。最も小きは、その直徑一寸に及ばず。
- 二。維盛の率ゐたる平家の軍勢は、富士川にて、水鳥の羽音に驚かされたり。

次の文章の主語、述語、客語及び補語に幾つかの修飾語を加へよ。

- 一。山高し。
- 二。馬、水を飲む。
- 三。弟は寫眞を母に贈れり。

第五章 文章の主要成分の位置

主語、述語の位置

- 花美し。
- 犬走る。

文主の位置

前の例の如く、主語と述語とにて成れる文章にては、主語は上にあり、述語はその下にあるを通例とす。
文主は、その述語の如くなれる文章の上にあるべきこと、勿論なり。

牛は力強し。

客語、補語の位置

われは字を書く。

將軍白馬に乗る。

父は家を子に譲る。

學校長は卒業生に證書を授く。

この例の如く、客語及び補語は、主語と述語との間にあるを通例とす。

學校長證書を授く

文章の主要成分の倒置。上に説きたる主語、述語、客語及び補語の位置は、わが國語にての自然の順序なれども、その文章の主眼とする主要成分をば、便宜に先に立たしむることあり。

行け、汝。

降れるか、雨は。

大いなるかな、孝の徳。

これらは述語を先に立たしめたるものなり。

夏休をわれらは待てり。

これを汝は何と思ふか。

雄々しき振舞をば人々ほめたゝへたり。

これらは客語を先に立たしめたるものなり。

舊師にわれは遇ひたり。
 弟には父この事を告げざりき。
 父母の命令には、子たるものは服従せざるべからず。
 これらは補語を先に立たしめたるものなり。

練習問題 第五

次の文章の主要成分の位置を通例の位置に改めよ。

- 一。美なるかな、山河の固。
- 二。昨日いづこに行きたるか、君は。
- 三。電車市營説に市民は舉りて反對せり。
- 四。かの話をば、われも聞きたり。
- 五。この機械に審査員は一等賞牌を與へたり。
- 六。かれの畫きし水彩畫を余は展覽會にて見たり。

余は彼画を於展覽會にて見たり

静なる湖の面に、富士山は倒にその影を映ぜり。
 いづれの社長にも、わが兄は重く用ひられたりき。
 満座の男女に老僧は隨喜の涙を流さしめたり。
 歌へや、君もめでたき歌を。

第六章 文章の主要成分の併置

主語の併置。文章の主要成分は併置することあり。

- 朝夕はすゞし。
 主人も客も共に笑ふ。
 横濱及び神戸は、わが國の二大港なり。
 酒と煙草とは養生によろしからず。
 これらは皆主語を併置したる文章の例なり。

主語併置の法則

則との承接の法

主語を併置するには、そのまゝ主語を重ね用ひ、またはこれを接續詞にて接續し、或は接續詞の用をなす且爾乎波にて承接せしむること、前の例に見るが如し。

すべて接續詞の用をなす且爾乎波とはその承接する語ごと一つく添ふるを法則とす。例へば

東京と大阪と京都とは、わが國の三大市なり。

されど最終のとを省略することあり。

月と雪と花は、いづれか美しき。

但し、例へば

山田と川村の保證人とは登校せり。

の如き場合に、最終のとを省略すれば、次の二様に解せらるる虞あり。

手
之
考
期
か

文主の併置

山田と川村の保證人とは登校せり。

山田と川村との保證人は登校せり。

されば、意のあるところに隨ひて、いづれにもとを存せざるべからず。

文主も併置することあり。

牛馬は力强し。

金も白金も産出多からず。

深井と清水とは、成績最も良好なり。

文主は、その構成、主語と同じければ、併置の法則もまた異なることなし。

客語、補語の併置。客語及び補語を併置する法則は、また主語を併置する法則に準ず。

この地は米、綿を産す。

われは酒をも煙草をも用ひず。

生徒は博物館と商品陳列所とを縦覽す。

これらは客語を併置したる文章の例なり。

學校長は卒業生及第生に證書を授く。

友は軍人にも實業家にもなれり。

頼朝は範頼と義經とをして平氏を攻めしめき。

この兒は知る人にも知らぬ人にも愛せられたり。

これらは補語を併置したる文章の例なり。

述語の併置

植物は發育し、生長し、繁殖し、枯死す。

道近く、平なり。

正行は忠臣なり、孝子なり。

殿下著任せられ、直に乗艦せらる。

これらは述語を併置したる文章の例なり。

述語を併置するには、上なる述語の動詞、形容詞、助動詞に中

止法を用ふ。

述語を併置するに、上なる述語の動詞、形容詞、助動詞の中止

法の下にて、またはしてを添ふることあり。

雨降り出でて、急にやまず。

川廣くして、淺し。

また名詞、代名詞と助動詞なり、たりとの結びつきで成れる述語を併置するに、その助動詞を省略して、に、にて、にして、としてなどを添ふることあり。

則 述語併置の法

報道敏速に且精確なり。

友の父は縣下の名望家にて、現に縣會議長たり。

風俗質朴にして、剛健なり。

絃聲嘈々として、また切々たり。

次に示すは、客語、補語と共に述語を併置したる例なり。

○太郎は學を好み、最も數學に達す。

將軍白馬に乗りて、陣頭に立てり。

マルコニーはイタリア人にて、無線電信を發明せり。

境しづかにして、太古の如し。

われらは明日汽車に乗りて、海岸を巡らむ。

この終の例にては、「汽車に乗りむ」といふべきを、動詞に中止法を用ひて、時の助動詞を省略したるなり。

述語の如く
置れる文章の
併置

文主に對して述語の如くなれる文章も、また併置することあり。その併置の法則は、述語併置の法則に準ず。

牛は體大きく、力強し。

われは身體壯健にて、元氣旺盛なり。

練習問題 第六

次の文章に就きて文章の主要成分の併置を説明せよ。

- 一。野も里も美しき朝日の光を浴みたり。
- 二。大臣、公卿悉く福原の京に移り給ひぬ。
- 三。かれと余とは郷里と小學校とを同じくせり。
- 四。兄は商業學校を卒業して一年志願兵となれり。
- 五。北畠親房は職原鈔、神皇正統記などを著しき。
- 六。滿洲軍は遼陽を取り、進んで遂に奉天を陥れたり。

- 七。これらの三人は、學術優等にて、品行方正なり。
- 八。金星は、その光甚だ明にて、恰も月のごとし。
- 九。余はこの有爲の青年を東京の大學者、新聞記者及び實業家に紹介せり。
- 一〇。現御神の君、明德愈遠くして、威稜五洲の外に振ふ。

第七章 文章の主要成分の省略

文章の主要成分の省略。文章の主語、述語、客語及び補語は、その一つを闕くときは、文章の成り立たぬことのあるものなれど、それと言外に推知することを得べき場合には、便宜にこれを省略することあり。

主語の省略。左に主語を省略したる文章の數例を示す。

(われは)昨夜おもしろき夢を見たり。

(人は)動物と植物とを生物と總稱す。

會員は(本會)之を特別會員と通常會員とに別つ。

命令をあらはす文章には、主語を省略すること殊に多し。

(汝等)前へ進め。

(何人も)樹木を折るべからず。

述語の省略。

これはいかに(ある)か。

(われ)冀はくは賢慮を運らされむことを(請ふ)。

同じ述語を併置する場合には、最終のものの外は、これを省略すること多し。

兄は軍人になり、弟は商人になり、妹は音楽家になりぬ。

客語の省略。

名古屋は、世人(これを)中京ともいふ。

酒は(汝等)(これを)飲むべからず。

われはこの詩を愛し、しばく(これを)朗吟せり。

補語の省略。

アメリカ合衆國は(自國に)併せたり。

先生は(わが校にて)英語を(われらに)教へられたり。

租税は(人々)期日に遅れぬやうに(これを)(その筋に)納む

べし。

犯人は(直に)官吏に(捕縛せられ)き。

侍従は(被害地を)巡視し、(町村長を)郡役所に召集して、あ

りがたき聖旨を(これらの人々に)傳へたり。

練習問題 第七

次の文章につきて、文章の主要成分の省略を説明せよ。

一。いざ人々と共に君が代の萬々歳を祝せむ。

二。道を行くには、左側を通れ。

三。出品に手を觸るべからず。

四。君はいづこへ。

五。われは伯父に擊劍を、從兄に英語を學びたり。

六。鎌倉に行くには、大船驛にて汽車を乗り換ふ。

七。趙高は馬を指して鹿といひき。

八。試験の成績は明日發表せられむ。

九。校則は堅く遵守すべし。

一〇。幹事の任期は一箇年と定む。

不文の省略

第八章 句及び節

句。

花美し。

犬走る。

われ書を讀む。

將軍馬に乗る。

これらは、いづれも一つの文章なること、既に説きたり。さて、これらの文章を用ひて、別に一つづつ、文章を作り、

花の美しきは櫻なり。

われは犬の走るを見たり。

かれは、われが書を讀むに倣はず。

この將軍の馬に乗る圖は、某大家の筆なり。

などいへば、かの文章は、いづれも皆その獨立を失ひて、この文章の一部分となる。即ち

花の美しき は 主語

犬の走る は 客語

われが書を讀む は 補語

將軍の馬に乗る は 修飾語

として、いづれも用ひてあり。かくの如く、文章の獨立を失ひて、他の文章の一部分となれるものを、句といふ。

句には、名詞句、形容詞句、副詞句などあり。

名詞句。句の文章中にありて名詞の用をなすものを、すべて名詞句といふ。

句の種類

花の美しきは櫻なり。

われは犬の走るを見たり。

かれは、わが書を読むに倣はず。

形の大いなるは價貴し。

羽織は紋のあまり大いならぬが行はるゝ風あり。

かくの如き名詞句にては、そのもとの文章の述語を成せる

動詞、形容詞、助動詞に連體法を用ふ。

且爾乎波と及びとては、また名詞句に承接することあり。

哨艦は敵艦見ゆと報ず。

衆議異議なしと決せり。

われは、試験はよく出来たりと思ふ。

かれは、病ありとて闕席したり。

この名詞句承接
つれづれとては、
名詞句承接

この名詞句承接

とはかくの如く終止形に承接するを法則とすれど、連體形に承接することもなきにあらず。

空のけしき、月出づると見えたり。

愚なるものは、おのれ他に嘲笑せらるゝとも知らず。

名詞句は文章の主要成分として、またその修飾語として、種々に用ひらる。

形容詞句。句の文章中にありて形容詞の用をなすものを、すべて形容詞句といふ。

この將軍の馬に乗る圖は、某大家の筆なり。

先生は才の短きわれを捨てたまはず。

瀑の落つる音は、百雷の轟く響に似たり。

われは庭訓の嚴肅なる家にて人となれり。

形容詞句にては、そのもとの文章の述語を成せる動詞、形容詞、助動詞に連體法を用ふ。かの連體法を用ひたる名詞句は、即ち下に名詞ことまたはものなどを省略したる形容詞句なることを見るべし。

形容詞句はすべて修飾語として用ひらる。

副詞句。 句の文章中にありて副詞の用をなすものを、すべて副詞句といふ。

浪靜にて、航海安全なりき。

物價騰貴せば、細民は生活に困しまむ。

道遠くとも、一度は來たまへ。

葉落ちたれば、木立さびしくなりぬ。

反對説起りしかど、建議案は成立しき。

寒さ厳しきに、參詣者多し。

昨日は日曜日なりしが、委員は皆執務せり。

即ちこれらの例にては、副詞句浪靜にてなどは、皆その下にある動詞、形容詞、助動詞の意義を限定して、述語の修飾語として用ひられたるなり。

年わかけれど、經驗に富める技師は、新に入社したり。

人々は水溢れて沼の如くなれる田畑を巡視せり。

兄は、年明くれば六つとなる妹に、お伽話を聞かせつ。

この例の年わかけれど、水溢れて、年明くればも、また皆副詞句にて、これらは主語、客語及び補語の修飾語の一部分として用ひられたり。

副詞句は、すべて修飾語として用ひらる。

節。

霜白し。

夜更けたり。

これらは、いづれも一つの文章なり。さてこの二つの文章を併置して、

霜白く、夜更けたり。

といへば、これまた一つの文章となる。この場合に

霜白く、

夜更けたり

を、いづれも文章の節といふ。

文章の節を併置するには、第六章に説きたる述語併置の法則による。

家は毀たれて淀川に浮かび、地は目の前に畑となる。
陸軍は奉天にて破られ、海軍は日本海にて滅されき。
月明に、星稀に、烏鵲南に飛ぶ。
峯の白雪深くして、谷の氷もとけざりけり。

練習問題 第八

次の文章の中の句と節とを挙げ、句につきてはその何句なるかをいへ。

- 一。わがかれを訪問したるは、昨日の午前なり。
- 二。人は皆おのが行の悪しきを覺らず。
- 三。われは獵師の山より還るに遇ひぬ。
- 四。幹事は準備成れりと満場に報告せり。
- 五。味のよき魚は、波の荒き海に住む。
- 六。世界は、日本のロシアに勝ちたる所以を研究せり。

- 七。一年、大學に講談會のありしとき、われも參聽しき。
- 八。有志者は君を候補者に擬したれど、君は起たざりき。
- 九。苦心のかひありて、氏の飛行機は遂に成れり。
- 一〇。友日夜勉強せしかば、月桂冠はその頭に加りぬ。
- 一一。水落ち、石露る。
- 一二。旅館の燈火かすかにして、鶏鳴曉を催す。
- 一三。なほ空しき地は多く、造れる家はすくなし。
- 一四。故郷は既に荒れて、新都は未だ成らず。
- 一五。わが國は東洋の強國と畏敬せられ、世界の列強は皆大使を駐劄せしむるに至れり。

第九章 文章の組織

文章の組織上の類別。文章は、これをその組織の上より類別して、單文と複文と重文との三つとなすことを得べし。

單文。

花美し。

犬走る。

われは書を読む。

父は家を子に譲る。

これらの文章は、これを組織する成分に多少の差はあれど、いづれも單一なる思想をあらはせり。かくの如き文章を、すべて單文といふ。

牛は力强し。

この例の如く、文主を含める文章も、また單文なり。

朝日に匂ふ山櫻の花、外つ國人に見せたきまで美し。
忙しき中に暫しの閑を得たるわれは、日頃慕はしく思
へる古聖賢の遺しし書を、徐に明窓の下に讀む。

この前なる例は、花美しといふ單文に種々の修飾語を附け
加へたるものにて、後なる例はわれは書を讀むといふ單文
に種々の修飾語を附け加へたるものなり。されば、そのあ
らはせる思想は、いづれも單一なれば、二つながら、また單文
なること明なり。

かの花もこの花も美し。

犬走り且吠ゆ。

われは神皇正統記と日本外史とを讀む。

父は長子と次子とに財産を讓る。

日本はイギリス、フランス、ロシアとは協約を結び、アメ
リカ合衆國とは覺書を交換せり。

公は識見高邁にして、精力絶倫なり。

これらの文章は、いづれも主語、述語、客語または補語を併置
せるものにて、またその思想單一なれば、なほ單文なり。

複文。

花の美しきは櫻なり。

先生は才の短きわれを捨てたまはず。

葉落ちたれば、木立さびしくなりぬ。

社長は、意見行はれざりしかば、直に辭職せり。

これらの文章は、いづれも句を含みて、そのあらはせる思想
は單一ならず。かくの如き文章を複文といふ。

重文。

霜白く、夜更けたり。

陸軍は奉天にて破られ、海軍は日本海にて滅されき。

月明に、星稀に、烏鶻南に飛ぶ。

これらの文章は、いづれも節にて成りて、そのあらはせる思想は単一ならず。かくの如き文章を重文といふ。

複文も重文も、単文とは異なり、共に重複せる思想をあらはすものなれど、複文にては、これに主従の關係あり、重文にては皆對等なり。

葉落ちたれば、木立さびしくなり、枯野のながめ、また異なる趣あり。

この例の如きは、一つの重文にて、これを組織する上なる節

複文と重文との別

は複文にて成り、下なる節は文主を含める單文にて成れるものなり。

陸軍は奉天にて破られ、海軍は日本海にて滅されしかば、ロシアも遂にその力の日本に及ばざるを覺れり。

この例の如きは、一つの複文にて、述語の修飾語に重文にて成れる副詞句を含み、また客語として名詞句を含めり。

練習問題 第九

次の文章を單文と複文と重文とに分類せよ。

- 一。 祠の傍に白き梅の花咲く。
- 二。 この人の金牌を得たること、これにて三度なり。
- 三。 柳は緑に、花は紅なり。
- 四。 相撲に負けたる力士、夜更けて歸る。

- 五。村の兒どもは里川の岸に鮪の子を漁れり。
- 六。わかき女は大根を洗へる手を休めて、こなたをながめたり。
- 七。精神一たび到らば、何事か成らざらむ。
- 八。會社は交際廣く、人品卑しからざる外交員を募る。
- 九。わが海軍に身を委ねむと志ししは、實に旅順口閉塞の壯舉が一代の少年のわかき純潔なる血を沸かしめし結果なり。
- 一〇。出で行く船も、入り来る車も、皆石炭を満載せり。
- 一一。身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。
- 一二。石の牀、木葉の衾、いとさむく、神清み、骨冷えて、物とはなしに、すさまじき心ちせらる。

第十章 文章の性質

文章の性質上の類別。文章は、またこれをその敘述の性質の上より類別して、平敘文と疑問文と命令文と感歎文との四つとなすことを得べし。

平敘文。

梅の花いと白し。

われは書を讀む。

原因はなほ明ならず。

友は本校より選手に選拔せられむ。

これらの文章は、いづれも思想をそのままに敘述したるものなり。かくの如き文章を平敘文といふ。

疑問文。

何をか武士道といふ。

このあたりや昔の城のあととなるべき。

夜ははや明けしか。

わが説、君が意を得たりや。

かしこに立てるは誰ぞ。

これらの文章は、いづれも思想を疑問の意にあらはせるものなり。かくの如き文章を疑問文といふ。

世の中は何か常なる。

われ豈これを知らざらむや。

これらもまた疑問文なれど、疑問の意は變じて決定の意となれり。かくの如きを反語の文章といふ。

反語の文章

命令文。

急がばまはれ。

帝國をして常に優越なる地位にあらしめよ。

生徒は必ず制服、制帽を著用すべし。

油断すな。

これらの文章は、いづれも思想を命令の意にあらはせるものなり。かくの如き文章を命令文といふ。

感歎文。

月のけしきはおもしろきかな。

かのをりのまとは、實に樂しかりしよ。

これらの文章は、いづれも思想を感歎の意にあらはせるものなり。かくの如き文章を感歎文といふ。

練習問題 第十

次の文章を平敘文、疑問文、命令文、感歎文に分類せよ。

- 一。笑ふ門には福來る。
- 二。各員一層奮勵努力せよ。
- 三。汝等は、寧ろ常識を具へたる凡人たれ。
- 四。夢にも君と親とを忘るな。
- 五。汝は平家の侍よな。
- 六。公もまた人傑なるかな。
- 七。軍人は忠節を盡すを本分とすべし。
- 八。わが實業家の團體は米國にて大いに欺待せられき。
- 九。一切の準備は既に整へりや。
- 一〇。何の幸かこれにしかむ。

第十一章 係結法

終止形を用ふる終止法

梅の花白し。

われ道を求む。

けさ鶯鳴きき。

この例の如く、終止法には普通に終止形を用ふること、既に

第三卷に説きたり。

逕體形を用ふる終止法。

梅の花ぞ白き。

われ道をなん求むる。

けさぞ鶯鳴きし。

前の例に示すが如く、述語の上にぞまたはなんといふ亘爾乎波の加りたる文章にては、その終止法に連體形を用ふるを法則とす。

梅の花や白き。

たれか道を求むる。

けさ鶯や鳴きし。

この例の如く、やまたはかといふ亘爾乎波が述語の上にある疑問文にても、同じくその終止法に連體形を用ふ。

已然形を用ふる終止法。

梅の花こそ白けれ。

われ道をこそ求むれ。

けさこそ鶯鳴きしか。

また述語の上にこそといふ亘爾乎波の加りたる文章にては、その終止法に已然形を用ふること、この例の如し。

係結法。上に説きたるが如く、述語の上にある亘爾乎波によりて終止法を異にすることを、係結法といふ。さてぞ、な、ん、や、か、こそその亘爾乎波を係といひ、係の亘爾乎波に應じて異なる終止法を用ふることを結といふ。

複文の係結法

色なん美しきに、香さへ高し。

われは今日こそ行くべかりしに、またも障出で來ぬ。

但しとの承接する名詞句は、別にその句に係結法を用ふ。

大臣はたれかあると召し給へり。

老武者一人、某こそ御供仕るべけれとなん答へける。

練習問題 第十一

次の文章の係結法を説明し、その誤れるものは正せ。

- 一。 日月流るゝが如し。
- 二。 われらの前途には希望あり。
- 三。 昔の世のさまは、かくやありし。
- 四。 白雲のかゝらぬ峯こそなかりけり。
- 五。 春と秋とは、いづれか樂し。
- 六。 物のあはれは秋こそまさる。
- 七。 新年を樂しみしは、昨日とこそおぼゆるに、學年試験ぞ、はや目の前に迫りぬ。
- 八。 かゝる道のはて、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ、わが國の風俗なれと、いとたふとし。

第十二章 文章の解剖

主部、説明部。 單文及び複文は、必ず主語と述語とを含むこと、その述語の性質によりては、これに客語、補語の加ること、また別に修飾語のこれらの主要成分に附屬することは、上に説きたるが如し。その主語とこれに附屬する修飾語とを併せて主部とし、述語と客語、補語と及びこれらに附屬する修飾語とを併せて説明部とす。主部は即ちその文章の主題たる部分にて、説明部はこれが動作、形状などを説明する部分なり。されば、いづれの單文も複文も、皆必ずこれを主部と説明部とに分つことを得べし。

次に單文、複文を一つ／＼主部と説明部とに分ちたる數例

を示す、その——を加へたる部分は主部にて、——を加へたる部分は説明部なり。

花美し。

梅の花甚だ美し。

われは字を書く。

壇上に立ちたる學校長は、第三回の卒業生と學年試験の及第生とに親しく卒業證書と修業證書とを授く。明治四十一年十月天皇陛下は、戊申詔書を降し給ふ。花の美しきも、實のうまさも、薔薇科植物に多し。

この時、哨艦は敵艦見ゆと報ず。

有力なる反對説起りしかど、建議案は遂に成立しき。年わかけれど、經驗に富める技師は、新に入社したり。

文主を含める文章にては、その文主とこれに附屬せる修飾語とを主部とし、文主に對して述語の如くなれる文章を説明部とす。

この牛は力强し。

小林生も大原生も共に品行方正にて、學術優等なり。

當地にては、帽子の縁の稍廣きが、最も賣行よし。

文章の解剖。一つの文章につきて、その組織、成分を検し、一つ一つに分解して、これが關係を明にすることを、文章の解剖といふ。

文章を解剖するには、次の順序によるべし。

- (一) 單文か複文か重文かの別を明にすべし。
- (二) 主要成分の省略せられたるものを補ふべし。

單文解剖の例

(三) 主部と説明部とに分つべし。
 (四) 主部に就きて、主語と修飾語とを指示すべし。
 (五) 説明部に就きて、述語とその修飾語とを、客語とその修飾語とを、及び補語とその修飾語とを指示すべし。
文章解剖の例。 次に單文を解剖する例を示す。

この時、わが砲兵は猛烈なる掃射を今や退却せむとする敵の騎兵に加へたり。

主 部 わが砲兵は

主 語 砲兵は

修飾語 わが

説明部 この時猛烈なる掃射を今や退却せむとする敵の騎兵に加へたり

文主を含める單文の解剖の例

次に文主を含める單文の解剖の例を示す。

漢城は韓國の首府にて、また京城といふ。

この文章には省略せられたる主要成分あり。これを補へば、次の如くなる。

漢城は韓國の首府にて、(世人は)これを(また)京城といふ。

述 語 加へたり

修飾語 この時

客 語 掃射を

修飾語 猛烈なる

補 語 騎兵に

修飾語 敵の

同 今や退却せむとする

主部 漢城は

主語 漢城は

説明部 韓國の首府にて

述語 首府にて

修飾語 韓國の

説明部 早文 (世人は) (これを) また 京城といふ

主部 (世人は)

主語 (世人は)

説明部 (これを) また 京城といふ

述語 いふ

修飾語 また

客語 (これを)

補語 京城と

次には複文解剖の例を示す。

賛成者なかりしかば、緊急動議は消滅せり。

主部 緊急動議は

主語 緊急動議は

説明部 賛成者なかりしかば消滅せり

述語 消滅せり

修飾語句 賛成者なかりしかば

主部 賛成者

主語 賛成者

説明部 なかりしかば

述語 なかりしかば

複文解剖の例

重文解剖の例

次に示すは、重文解剖の例なり。

石の階九仞にかさなり、朝日、朱の玉垣をかゞやかしぬ。

第一節 單文 石の階九仞にかさなり

主 部 石の階

主 語 階

修飾語 石の

説明部 九仞にかさなり

述 語 かさなり

修飾語 九仞に

第二節 單文 朝日、朱の玉垣をかゞやかしぬ

主 部 朝日

主 語 朝日

説明部 朱の玉垣をかゞやかしぬ

述 語 かゞやかしぬ

客 語 玉垣を

修飾語 朱の

練習問題 第十二

次の文章を解剖せよ。

- 一。早朝、鹽竈の明神に詣つ。
- 二。沈黙は愚人の甲冑なり、奸者の城塞なり。
- 三。舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。
- 四。大志を懐くものは、身を持すること堅し。
- 五。黒紗の如き雲の絶間より月こそあらはれて候へ。
- 六。桃李、抑、何を言ひてか自ら蹊を成せる。

- 七。相構へて今度宇治河の先陣勤めて高名し給へ。
- 八。老将は兵を談せず、良賈は深く藏す。
- 九。言多きものは卑しとせられ、語少きものは憚らる。
- 一〇。造化の大能力に比して、人間の微なることを思ひ、崇高の念凜然として懐を動かせり。
- 一一。峽中の朝風面を吹きて、心地よく、疲勞も稍癒え、體力も稍復し、驢背にも稍慣れたり。
- 一二。かの建築、かの彫刻、かの繪畫、一面は、これが保存にとめ、一面は、これが振興につくさざるべからず。

日本文法教本 卷四 終

明治四十二年十二月十八日 印刷
 明治四十二年十二月廿一日 發行
 明治四十三年二月廿二日 訂正再版印刷
 明治四十三年二月廿五日 訂正再版發行

日本文法教本
 每卷賣價金貳拾錢



金澤庄三郎

東京市小石川區小日向水道町七十三番地

西野虎吉

東京市京橋區築地三丁目十一番地

野村宗十郎

東京市小石川區小日向水道町七十三番地

開成館

〔振替貯金口座〕東京五番郵便局

大坂市東區心齋橋通北久賣寺町角

三木佐助

東京市日本橋區數寄屋町九番地

林平次郎



著者 金澤庄三郎
 發行者 西野虎吉
 印刷者 野村宗十郎
 發行所 開成館
 販賣所 三木佐助
 販賣所 林平次郎

